

ウェルビーイング指標を活用し、 より良い経済・社会へ

松下 美帆
（一橋大学経済研究所
世代間問題研究機構）
准 教 授



<高まるウェルビーイングへの注目>

「ウェルビーイング」という言葉を目にする機会が増えてきた。本稿では、ウェルビーイング指標に関する国内外の政策動向を紹介しつつ、まだ定訳がないと言える「ウェルビーイング」の意味や、政策上の課題について触れたい。

<コロナ禍でのテレワーク普及とウェルビーイング>

筆者は、内閣府の調査ⁱを用い、コロナ禍でのワークライフバランスや生活に関する満足度等の変化を分析する研究に携わったⁱⁱ。コロナ禍でテレワークをした子育て世帯の男性の生活満足度は高まった一方、テレワークをした未婚男性は社会とのつながり満足度を押し下げる可能性があることが分かった。

従来、テレワークの活用はワークライフバランスの観点で推進されてきた。分析結果は、単にテレワーク実施率の向上を追求すると、ウェルビーイングが下がる場合があり得ることを示唆する。こうした状況は、テレワーク促進施策だけでなく、生活に関する様々な政策分野で生じ得る。政策の成果において、国民のウェルビーイングを考慮する必要があるのではないか。

<GDPでは計測できない生活の質・社会の進歩をどう把握するか>

政策の場面でウェルビーイングを考慮する考え方は、GDP（国内総生産）では測れない豊かさの議論に伴い進化した。2009年、ステイグリッツ教授らによる報告書ⁱⁱⁱでは、GDPは生活の質や社会の進歩を測るためにデザインされていないとして、ウェルビーイングに関する複数の指標をダッシュボードで把握し、政策に活用することを提案した。近年、多くの国で、ダッシュボード導入が進む。日本は2019年度から、生活満足度と13分野の満足度及び客観指標をダッシュボードにしている^{iv}。

<生活満足度と個人のウェルビーイング>

内閣府調査では、生活満足度を「あなたは現在の生活にどの程度満足していますか」と質問する。諸外国では、満足度だけでなく、複数の面から「主観的ウェルビーイング」を捉えようとする。例えば英国では、①人生・生活の評価、②人生の目的や意義に照らしてどうか、③昨日、幸せを感じたか、④昨日、不安を感じたかを問う。換言すると、①～④を主観的ウェルビーイングの構成要素として設問している。

<日本では「自分の仕事が世の中の役に立っていない」と感じる者が多い>

内閣府の調査では、②と同様の質問は設定されていないが、（一社）経済社会システム総合研究所の2022年夏の調査に類似の設問がある。日米独で調査を行なった結果、日本の生活満足度（平均5.6点）は、米国（同7.0点）やドイツ（同6.8点）と比べ低かった。また、「仕事・学業・家事が世の中の役に立っている」と感じない割合が日本では高い^v。分析すると、「役に

立っている」と感じる者の生活満足度（平均6.6点）と比べ、「役に立っている」と感じない者の平均は4.9点と低い（図表）。同調査では、周囲（職場・学校、家族、地域）に信頼できる者がいるか、周囲から信頼されている実感があるかも設問している。職場に「信頼できる人が0人」と回答した割合は、日本では48%（米国やドイツの2倍）、職場に信頼できる人が1人以上いると回答した者（52%）より、生活満足度が有意に低い。また、日本について、仕事等で役に立っている、仕事等に喜びを感じる、周囲を信頼できると思う場合、あるいは、周囲からされていると思う場合には、生活満足度が高い傾向が示唆された。

図表. 仕事で世の中の役に立っていると感じるかどうかと生活満足度^{vi}

	「仕事・学業・家事で世の中の役に立っていると感じない」回答者の割合	「役に立っていると感じない」と回答した者の生活満足度（1点～10点で評価）の平均値	「役に立っていると感じる」と回答した者の生活満足度の平均値
日本 (N=1,881)	47.7%	4.9点	6.6点
米国 (N=961)	16.4%	5.7点	7.6点
ドイツ (N=1,133)	19.4%	5.9点	7.2点

<ウェルビーイング＝「自分よし、周囲よし、未来よし」>

主観的ウェルビーイングはウェルビーイング指標の一つの分野にすぎず、ウェルビーイング指標には、他にも「社会とのつながり」や「政治・ガバナンス」、「仕事と生活」、「教育・スキル」等、多くの要素がある。指標選定に際し、持続可能性や将来世代、公平性といった軸を設定する国もある。これらを踏まえ、筆者は、ウェルビーイングの定義を、「自分よし、周囲よし、未来よし」と置き換えて考えるようになった。

内閣府の世論調査では、生活満足度は過去数十年間にわたり高い水準で推移^{vii}しており、一見、問題がないように見える。しかし、周囲との信頼が揺らぎ、役立つ実感が低く、満足度が低い状態は、将来に誇りを持って引き継げる社会だろうか。ウェルビーイングとイノベーションや成長力の停滞、あるいは少子化との関係についてももっと研究が必要だろうし、各国のダッシュボードも参考に、日本でのウェルビーイングの計測について発展させる必要があるだろう。

<おわりに>

ウェルビーイング指標の計測だけでなく、例えば、英国、NZ、フランス、イタリアは、政策立案や予算編成に指標を活用し始めた。政府横断的にダッシュボードで計測したウェルビーイングの動向や見通しのデータを、予算案とあわせて国会に提出し、予算審議できるよう法定した国もある。

政府レベルでは、国民のウェルビーイングの状態を、主観指標と客観指標から、より多角的に把握し、予算のPDCAに結び付ける仕組みが必要と考える。また、企業においても、経営サイド・従業員サイドの双方が、満足感ややりがい、意義、信頼醸成といった点に、より多くの注意を払い、行動を変え、自分も周囲も将来も働きやすい環境が実現すれば、活気あふれる経済・社会になるのではないだろうか。

i 内閣府「新型コロナウイルス感染症の影響下における生活意識・行動の変化に関する調査」（第1回～第4回）
 ii 白井 恵美子, 佐藤 蘭香, 松下 美帆 (2022)「新型コロナウイルス感染症の影響下におけるワーク・ライフ・バランス」『経済研究』第73巻第4号, pp. 358-391
 iii Stiglitz, J.E., A. Sen and J.-P. Fitoussi (2009). Report by the Commission on the Measurement of Economic and Social Progress
 iv 内閣府「満足度・生活の質に関する調査」、「満足度・生活の質を表す指標群（well-beingダッシュボード）」
 v (一社) 経済社会システム総合研究所「KAITEKI研究会」『社会課題に関する3か国（日本・米国・ドイツ）意識調査 - 生活者、働き手、消費者、投資家、有権者としての意識-』（2022年10月27日公表）
 vi (一社) 経済社会システム総合研究所前掲調査より筆者作成
 vii 内閣府「国民生活に関する世論調査」（2021年9月）